

## 国内経済情勢

### 概 観

11月の出荷は4ヵ月ぶりに増加を示し、生産もこのところやや持直しているが、大勢としてみると景気回復の足取りは引続き緩やかである。

この間、12月の商品市況は総じて軟調に推移し、卸売物価の上昇率も引続き小幅にとどまった。もっとも消費者物価は公共性料金の引上げもあってかなり大幅な上昇を示した。

金融面では、企業の資金需要は大企業を中心に鎮静を続け、マネーサプライも落着き傾向を強めている。

11月の国際収支は、資本収支が流入超に転じたため、貿易収支の黒字幅は縮小したものの、総合収支では再び黒字となった。

#### 生産、出荷とも増加

11月の鉱工業生産(季節調整済<sup>\*</sup>み、速報)は前月比+2.2%とかなりの増加となった。業種別にみると、一般機械、紙・パルプなどがわずかながら減少したが、非鉄、石油・石炭製品(灯油等)をはじめ、化学(合成樹脂)、電気機械(民生用電機等)、輸送機械などほとんどの業種で増加した。

<sup>\*</sup> 以下前月比は、物価を除き季節調整済み。

鉱工業出荷(速報)は、前月比+3.5%と4ヵ月ぶりに大幅増加となった。財別にみると、一般資本財や資本財輸送機械が大幅にふえ、耐久消費財もかなり増加した。

この間、生産者製品在庫(速報)は、鉄鋼、繊維、金属製品等を中心に前月比+1.7%と3ヵ月連続の増加となった。一方生産者製品在庫率(45年=100)は、出荷の増加を映じて124.3と4ヵ月ぶりに低下した(前月126.4)。

11月の設備投資関連指標では、一般資本財出荷(速報)は、化学機械、農業機械等が減少したものの、受注機種、汎用品、土木建設機械などが引続き増加したため、前月比+6.0%の大幅増加となった(前月同+1.0%)。一方11月の機械受注額(船舶を除く民需)は、電力向け受注が前月に続いて大幅な減少を示したため、製造業向けが2ヵ月連続の増加となったものの、全体では前月比-8.2%の減少となった(前月同-22.2%)。この間、建設工事受注額(民間産業分、速報)は、前月比+7.1%と3ヵ月連続の増加となった(前月同+2.8%)。

10月の新設住宅着工戸数は、住宅金融公庫融資分の増加もあって前月比+4.7%と4ヵ月ぶりに増加した(前月同-6.5%)。

11月の全国百貨店売上高(速報)は、衣料品の伸び悩み、雑貨類の不振などから前月比-1.5%と再び減少した(前年同月比+7.1%)。また12月の乗用車新車登録台数も、前月急増(前月比+23.0%)の反動もあって前月比-7.5%と減少した。

11月の労働関係指標の動きをみると、有効求人倍率は0.58倍と3ヵ月連続して低下したほか、新規求人倍率も0.91倍と前2ヵ月に続き1倍を下回った。また常用雇用も2ヵ月連続して微減となったが、所定外労働時間は、製造業の持直しを主因

に前月に続いて増加した。

#### 卸売物価の落ち着き傾向続く

12月の商品市況をみると、灯油が続伸したほか銅、綿糸が小戻したが、輪内需の伸び悩みなどを背景に、鉄鋼、繊維が続落したのをはじめ、木材、紙、砂糖なども軟調に推移するなど、総じて弱地合いを続けた。

卸売物価は、11月に前月比+0.3%の上昇となったあと、12月も同+0.1%と微騰にとどまった。品目別にみると、食料品、化学製品などが値上りした反面、鉄鋼、合繊、綿花、木材など多くの品目が内需不振や海外市況安から下落した。

一方、12月の消費者物価(東京、速報)は、衣料品、野菜等がやや値下りしたものの、電報・電話料金が大幅に引上げられたことを主因に前月比+1.0%(前月同+0.4%)と再びかなり上昇し、前年同月比では+10.5%と8ヵ月ぶりに2けたとなった。

#### 公社債市況はやや堅調

12月の金融市場をみると、銀行券は24,196億円の発行超と前年(同22,235億円)をやや上回った。一方財政資金は、税収増、運用部融資減等から一般財政の払超幅が大きく縮小したため、国債発行が前年比半減したものの、全体で払超は2,789億円と前年(同7,424億円)を大幅に下回った。この結果、月中の資金不足額は22,268億円と前年(同15,742億円)をかなり上回ったが、日本銀行はこれを貸出のほか債券・手形の買オペレーションで調整した。

この間、コール・手形売買市場では、需給は引締まり基調で推移し、繁忙感の強まった24日にコール・レートは0.5%上昇したが、31日には銀行券の大幅還流を映じてコール・レート、手形売買

レートとも0.5%低下した(低下後のコール無条件もの出し手レート7.0%、手形買い手レート7.5%)。

12月の銀行券平均発行残高は、前年同月比+11.3%と前月(同+11.6%)に続いてやや伸び率を低めた。また11月のマネーサプライ(M<sub>2</sub>、平残)は、対民間信用の増勢鈍化などを映じて前年同月比+14.3%と落ち着き傾向を強めた(前月同+14.9%)。

11月の全国銀行(銀行勘定)貸出は、前月末休日による高止まりの反動もあって4,850億円増と前年(7,688億円増)を4割方下回り、月末残高の前年比伸び率も+11.0%と前月(同+11.4%)に比べ低下した。企業の資金需要をみると、季節的な決算・賞与資金は前年を多少上回っており、輸入関係や一部非製造業(流通、住宅関連等)の需資も漸増傾向にあるが、大企業製造業を中心とする追加的資金需要は低調に推移しており、全体としてみれば引続き鎮静基調にある。これに対し金融機関は、貸出の健全性保持には慎重な配慮を払いつつも、引続き弾力的な融資態度で臨んでいる。

11月の全国銀行貸出約定平均金利は、前月末休日に伴い手形書替えがずれ込んだこともあって月中-0.012%と前月(-0.005%)に比べやや低下幅を拡大した。

12月の公社債市況は、都市銀行等の売控えもあって通月強調裡に推移し、特に月末にかけて証券会社の買い姿勢が強まったことなどから、上伸傾向を強めた。また株式市況は、原油値上げ等をめぐる懸念材料がほぼ出尽したことを背景に、投資信託等の買いに支えられてほぼ通月続伸歩調をたどった(東証指数月末383.88、月中+38.09)。この間、22日には委託保証金率の引上げなど信用取引規制の強化措置がとられた。

### 貿易収支の黒字幅縮小

11月の国際収支は、貿易収支が輸出の落込みと輸入の増加から前月に比べ黒字幅を半減したが、長期資本収支の流出超が縮小したほか、短期資本収支も大幅な流入超に転じたため、総合収支は前月の赤字(98百万ドル)から再び280百万ドルの黒字となった。

11月の輸出(通関ベース)は、前月比-2.7%と2か月連続の減少となった(前月同-4.4%)。これは、自動車、弱電等が増加したものの、鉄鋼、船舶が2か月連続して落込んだほか、繊維品等も減少したためである。地域別にみると、米国、中近東向けが再び増加したものの、EC向けが3か月ぶりに減少したほか、中南米、アフリカ向け等も引続き減少した。

他方輸入(通関ベース)は、前月比+11.8%と前月減少(同-7.8%)のあと再びかなり増加した。これは、綿花、砂糖等が減少したものの原油、木材の入着増に加え、石炭、羊毛等もかなり増加したためである。

12月のインターバンク米ドル直物相場は、前月来の地合いを受けて月初は総じてドル高に推移したが、中旬以降は海外円需要の復調や為銀の手許取崩しなどから反落商状となり、月末近くには一時292円台まで軟化した(月末293円、月中3円45銭安)。

12月の外貨準備は月中121百万ドル減少し、月末残高は16,604百万ドルとなった。

(昭和52年1月14日)